

おこっパ 初夏のライブ

ポーセン・ジェレッド氏のワンコインライブを行います！

日常を離れて生の音楽を聴く、ちょっとだけ贅沢なひと時はいかがですか？

オリジナル曲に加え、沖縄の曲「花」や矢沢永吉などのカバー曲も登場します。

出演者：ポーセン・ジェレッド

アメリカ、ワシントン州生まれのシンガーソングライター。
2007年来日。以来、北海道中頓別町に在住。ギターとハーモニカを相棒に、ロックから子ども向けの歌まで幅広い分野の曲を英語と日本語で歌う。カンフー教室の先生でもあり、パラグライダーで空を飛ぶことも。



6月23日(土)

興部町 総合センター ロビー

開演：18:00 (開場:17:30)

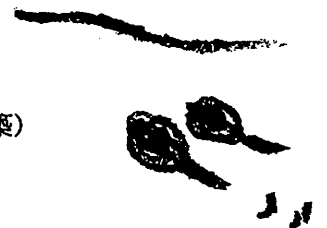
入場料：500円 (高校生以下無料)



主催： おこっパライブ委員会

(お問い合わせ：0158-82-4566 都築)

後援： 興部町教育委員会



旅にちょっと疲れたときに

旅をする。人それぞれに様々な理由があります。そこに行ってみたい、自由を味わいたい、自然を感じたい、何でも見たい、食べ歩きたい、出会いが欲しい、日常から飛び出したい、何かを見つけない、失恋や苦しい立場から逃げたい、自分を試してみたい、もっとモラトリアムを謳歌したい、今をリセットしたい、とにかくいろんなワケがあると思います。長く旅を続けていると、最初は非日常だった筈なのに、旅自体が日常になってしまうことがあります。あまりにも自由過ぎる毎日が続き、何かが足りないような、何かが恋しくなるような、何かに縛られたくなるような・・・そんな時、ちょっと寂しくなったり不安になったりもします。「俺、マジで社会復帰できるかなあ？」なんて。

今から20数年前、僕もそんな気持ちを抱えつつ毎日を勝手気ままに過ごしていました。「帰りのチケットも売っちゃって、もっと他の国にも行っちゃおうかなあ」、なんて考えている頃でした。どこに行っても、そこでなんとなくウマクやっていけそうな変な自信もありました。

その出来事は、ちょうど作物の収穫の仕事などをやって少し稼いだ後の事でした。バックパッカーズに泊まって、のんびり飲みながら居合わせた連中と玉突きをしている時でした。その年には北京でとてもショッキングな天安門事件があり、連日トップで報道されていました。民主化を求めた若者達に国家が牙を剥いたとんでもない事件でした。順番に玉を突く中で、僕らより年配のイギリス人が新聞を見ながら事件について盛んに批判をしていました。「バカな国だよ中国は。これでまた20年は遅れちゃうだろう。だから俺はアジアは嫌いなんだ。連中ときたら・・・」、まるで自分の不満の全てはその事件のせいみたいに、尽きることなくしゃべっていました。まあ、その全てが聞き取れた訳ではないけれど、楽しくなるような批判じゃないことはよく分かりました。なんでも彼は10代から世界中を旅していて、大都市でちょっと稼いでは20数年も旅を続けているというのが彼の自慢でした。気ままに旅を続けて定住せず、家庭を持たず、きちんと社会参加をしないその彼が事件を批判している姿を見て、無性に腹が立ってきました。「お前にそれを言う資格なんかあのかよ？」と。そして次の瞬間、僕の身体に稲妻が走りました。クラクラする程の衝撃でした。

「ここにいるこいつは20年後の俺じゃないか」。

しばらく立ち尽くして、その後スーッと気持ちが楽になったのを今でもよく覚えています。

それが僕にとってはひとつの区切りでした。

今、僕はここオホーツクに住み着いています。

時々、昔の僕のような迷い子に会うことがあります。僕は昔の旅の中で受けた様々な情けを少しでも返したくて、迷い子達と話し込んだりもします。

「旅をして何処かに帰る」、帰る場所を見つけるのも旅なのかも知れませんね。

自分達が学んだ事を次に伝える。今の時代をちょっとだけ良くして次の世代に渡すことが自分達の役目なんだなあ、なんて最近強く思います。

特にお金やエネルギーの問題。きっと求めたらキリがないのでしょう。ムダに稼いでムダに使ってしまう時代は、出来ればもう終わりにしたいものです。

ここで出来ること、ここだからこそ出来ることを実践しながら、自分のライフワークとして、今をほんの少しだけでも良くして次世代につなげていきたいものです。

今生きている全ての人、みんながバトンなのだから。

「なまら蝦夷 宿主達の旅案内 8号」より抜粋

